

---

# 戦争の被害者

ロースト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦争の被害者

### 【NZコード】

N1770M

【作者名】  
ロースト

### 【あらすじ】

三人それぞれの視点からお送りします。

第一話 恋人の話。

## 恋人の話

### 恋人の話

まるで地獄の底から発されているかのような声だった。

そして人はここまで出来るのかと半ば感心するほどに長い、長い咆哮だった。

でも、ずっと続くかのように思えたソレも途絶えた。

それも突然に、不自然なぐらいにあっけなく、終わつたのだ。

「ああああ・・・」と消え入るような声が最期だった。

まだ叫び足りないとでもいうよつた余韻が残つて、重い沈黙が場を支配する。

息苦しいぐらいに。それどころか、息もまともに出来ないぐらいに圧倒的な沈黙。

いつそ、この部屋から出でてしまいたいぐらいだった。でも、それは出来ない。

こんな状態の愛しい人をこのままこんな部屋にひとり残すわけにもいかない。

この人は悲しい人だ。とても可哀想な人で、とても残酷な人。自分の事を見ている人がいるというのに、こちらのことなんてまるで気づかない。

こちらのことなんて目にも入らないどころか、認識さえしてない。とても残酷な人。

なのに、自分は死んだ人のことを思つて、嘆き、悲しんでいる。ひどく、残酷な人。

彼が死んだのは、私も悲しい。

それどころか、彼は私の好きな人だったのに。  
なのに、何であなたが嘆くの?  
なのに、何であなたが悲しむの?

あなたが殺したのに・・・・

あなたより、私のほうが悲しむべきなのに。  
なのに、何であなたのほうが悲しいって思わされないといけないの？

あなたが殺したんだよ。

彼を殺したのは、あなた。

あなたが殺したんだ。

あなたが殺した

でも、それはしようがないんじゃなかつたの？

でも、それは終わつたことじやなかつたの？

これは戦争なんだから、仕方なかつたんじやなつたの？

だからあなたを憎むのをやめたのに。

だからあなたを好きだという気持ちを認めたのに。

だつて、彼は敵国のスパイだつたんだよ？

彼は私の恋人で、あなたの親友で、

でも、彼はスパイだつたんだよ。

あなたは正しかつた。でも、間違つていた。

でも、戦争はまだ終わらないんだよ。

あなたは戦争を終わらせる責任がある。

あなたは生きなきや。

だから、立ち上がつてよ。

戦争を終わらして。

もう、悲しみなんてこれ以上つくらないで。

こんな思いをするのは私だけで十分。

こんな思いをするのはいつかいだけで十分。

だから、戦争を終わらして。

こんな悲しみを、なくして。

だからお願い。立ち上がつて。

立ち直つて。どうか、悲しまないで。

強く、生きて。悲しまないで。

一人で、幸せになりましょう。

もう、三人には、戻れないのだから。

こんな風に、彼を急き立て、追い詰める自分は、  
もう、壊れてしまっているのかもしれない。

彼のような咆哮はしていなけれども、私の方が彼以上に、  
取り返しの付かないところまで、悲しみ、壊れてしまっているのか  
かもしれない。

## 軍人の話

### 軍人の話

目が覚めた時は霧がかかったように頭がぼんやりして、何も考えられなかつた。

でも、時が経つにつれ頭がはつきりしてきて、記憶を思い出していくと、身体が震えだした。歯の根が合わなくてガチガチと音が鳴る。涙が両目から絶え間なく溢れ出でていて、ただ、恐怖に震えている。

ここがどこだとか、

男なのに見つとも無く震えて泣いているとか、そういうことは、はなから頭にない。

ただ、ただ、

自分の感情には関係なく、身体が震える。

これは別に俺が恐怖を感じているのではなく、目が覚める前の記憶が、自分が死ぬといつ、記憶だったからだ。身体が条件反射でその記憶に対し恐怖しているのだ。身体が恐怖に支配されて、ぜんぜん動かない。

それでも、力を振り絞つてようやく一言、声に出す。

「俺は生きているのか」

恐怖に支配された身体が作り出す声は、

心に反して、小さく、

頼りなかつた。

でも、震えてはいなかつた。

心の平静を表すかのように静かだつた。

己の震えることしか知らないかのような身体と

静かで取り乱すことを知らないかのような平静な心が

とてもアンバランスだった。

だが、ふと思い、

今までのことが嘘だつたかのよつに心を取り乱す。

自分が発した声を聞き、

自分が生きていることを改めて認識した。

今、俺が取り乱している理由は、自分が生きているという事実だった。

普通なら、そこは安堵するべきだが、自身としては自分が生きているという事実は恐怖に値することだった。

いや、正確に言うとするなら、生きているといつて怖いことに恐怖しているのではない。

自身が生きていることから推測される自分の未来に対する恐怖しているのだ。

でも、どこかで、そんな自分を冷めた眼で見つめる俺がいた。

俺がいた国は今、戦争をしている。

俺は軍人だ。はやく国に戻り、国を守らなければ。

そのこともどこか遠くて、まだ眠っているかのよつてほんやりと思つていた。

でも、あることに思い至つて、『帰りたくない』と強く思つた。

俺はもう、死んだとされているだらうから。

もし、そうでなくとも、戦争に参加して死ぬだけだ。

俺の国はもう負けるんだから、さっさと白旗を揚げればいいの。」  
フト、そう思つた。

運悪く、他国のスパイだと思われて俺は殺されるのかも。

なら、国に帰らなければいいのだ。

・・・・・マイナス思考に陥つてゐるな。

そうすれば、死ぬ必要はない。

だから

国に帰りたいと思つ。

心が矛盾している。

帰れば死ぬ。だが、あの国には、親友が、恋人がいる。

思い出が脳内を早足で駆け巡る。

せめて、彼らの安否だけでも確認したい。

そう、切に願った。そこからどんどん想いが溢れていく。

これは郷愁というものか。そして同時に帰つたら、帰つた後を想い、

身体が震える。

それでも、帰ろう。あの国へ。帰ろう。あの街へ。帰ろう。彼らのもとへ。

震えた身体を鞭打ち、引きずり、それでも帰ろうとこう想いで向かう。

信じてくれないかもしないけど、俺はあの爆発で、あの戦いで、生き残つたんだって。

彼らは信じてくれるだろうか。

恐怖がないといったら嘘になるけど、彼らだけは信じてくれそうな気がする。

少し、自惚れ過ぎだろうか。しかし、他の人たちは信じてくれないだろう。

あんな、激戦地で戦つて、あの爆発の中心地近くにいた俺が残つているなんて。

あの大爆発だ。

信じろって方が土台無理な話だ。自分なら信じられないだろう。

あの気のいい上官は死んでしまつただろうか。

死んでしまつているのだろう。

あの大柄だけどよく気が利くあの青年は死んでしまつただろうか。死んでしまつっているのだろう。

もう他に、誰も生き残つてはいなか。残されたのだから。

誰も生き残つてはいなか。皆、もういなか。残されたのだから。俺は。

生き残つていて欲しい。

でも、彼らが、信じてくれるなら、俺は上官が、青年が死んでいてもいい。

酷い考えだ。それでも、藁にも縋る想いで思つた。希望はもう、な  
いけれど

彼らが生きていれば、他はどうでもいい。本心でそう思つ。心から、  
そう願つ。

たとえ自分が殺されても、あの一人が平和で、幸せに生きていれば  
いい。

帰りたい。彼らのもとへ。会いたい。彼らに会いたい。

笑顔を見せて欲しい。

理不尽なことも、悲しいこともなく、

幸せに、笑つて、生きていて

欲しい。

希望を失くすことなく、純粹に、まっすぐに、生きて欲しい。

彼らを守りたい。だから、

帰ろう。あの国へ。帰ろう。彼らのもとへ。

「　　帰ろう。彼らのもとへ。たとえ、死ぬことになつても。」

## 親友の話

### 親友の話

殺した。それを認識することは出来ても、理解することは不可能だつた。

俺が、殺した。現実感が全くない。

それでも、目の前に今、友であつたモノが転がつていて。人じゃない。モノだ完全に、言いようのないほど、モノだ。

腕は無造作に投げられていて、腹からは失血死に至るほどの大粒の血。

その開かれた両の目は瞳孔が開き、

焦点は定かではなく、どこを見つめているのかわからない。

以前その目に捉えていたのは、俺と、彼女と、そして三人の幸せだつた。

こいつは昔からただ、それだけを望んでいたのに。

なのに、俺は

信じてやれなかつた。

敵国のスパイだと思い込んで、上層部の連中の言葉に甘く騙されて、

“だから”つていうのはただの言い逃れだけど、

友を、親友を、信じてやれなかつた。

友を、親友を、手にかけてしまつた。

それを理解するのを拒否するように俺の身体は絶えず震える。

まるで拒否反応でも起こしているかのようだと、客観的に思つてしまつ。

何をすれば償える?

何をすればあがなえる?

お前がいないなんてこと、考えられない。

お前はどこにいるんだ?

ここにはいない。この街にいない。この国に、この世界に。  
どこだつていい。ただ、お前が生きていれば、どこだつて  
おまえは、どこにいるんだ？

あの瞬間が、脳裏に焼きついている。

最期まで、笑つていた。

俺たちを見て、安心したつて、言つて、笑つていた。  
心から安堵した、本当に幸せそつた、笑みだつた。  
今でもあの笑顔が忘れられない。

いままで、何度も、何度も笑顔を見てきた。

それどころか、笑顔以外はほとんど見たことがない。  
俺がこうこうの、変な話だけど、最期の笑顔が一番、よかつたと  
思える。

自分が死んで行こうといつ時に、

自分たちの顔を見て、心から安堵したように、一番の笑顔で笑つて  
いたんだ。

自分を刺した奴を、自分を殺そつと殺意を持ってナイフを刺した奴  
をみて、笑つたんだ。

目を閉じなくても、思い出せる、たくさん思い出。

三人一緒に幸せに暮らしていた、あの日々。

何をやるにしても楽しくて仕方がなかつた、平和な頃。

なのに、今、頭の中で一番よみがえる記憶は直前の映像。  
この指に残るゆびきりの感触でも、

幼い時に握つた手の温もりでも、

花のような甘くさつぱりとした匂いでもない。

見たこちらまでも幸せになるよつた、あの笑顔とも違う。  
一番印象的なのはずっと身近にあつた、それらではなく、  
むせかえるような、濃厚で存在感のある血のにおい。  
それに混ざつて微かだけど確かにある腐臭。

ソレら。

それらを鮮明に、覚えている。

あいつが死ぬ時の、人に、

人の身体にナイフを突き立てた、あの感触。

硬くなくて、それどころか柔らかい。

でも、ナイフがするりとは入らない、

実のよく詰まつた、重い、肉の感触。

グジヤやブスツと音を立てそなあの、感触。

あいつが死ぬ時の、身体から溢れだしたあの夥しい程の量の血。

俺が刺した傷口から溢れ出す血飛沫に濡れていく自分。

そしてその凄まじく嫌な光景。

突き立てたナイフの傷口から止め処もなく噴射するように飛び出す、人の体温を削り取る温かな、どろりとまとわりつく、

赤い水。視界が赤一色に染まつた。

あいつが死ぬ時の、死人のそれが発するのとおなじ、おぞましいにおい。

腐臭。腐敗臭。

生理的嫌悪感と吐き気を誘う、あのにおい。  
コレ、があいつとは思いたくない。

涙が溢れ出してくる。

でも、俺の脳はまだ麻痺したままなんだ。

どこか、胸にぽつかりと穴が開いてしまつて いるかのような、そんな気分。何も、わからない。いや、何も、わかりたくない。

一番、守りたかったのに。  
一番、大切だつたのに。

おれは、守りたかったものを、大切なものを、自分の手で、もぎ取つた。

それでも、あいつは

最期まで、笑つていたんだ。

俺は一生、忘れられない。

あの、幸せそうな笑顔が頭から離れない。

もう戻れない。

あの時には、戻れない。

あの幸せな時には戻れない。

俺は、あの時、なんの躊躇いもなく、  
あいつを殺そうとした。

俺が殺した。

一瞬で、楽しい記憶も、大切なものも、  
幸せな未来も、すべてを失った。

自分の手でそれらをもぎ取つた。

ソレがどういう行為か、わかつてなかつた。

わかっているつもりでも、本当の意味でわかつてなかつた。

人の命は容易く、どんなに強くみえたつて、

弱く、小さい、儚いものだつて知つていたはずなのに。

なのに、俺は

守れなかつた。

それどころか、自分で、

壊した。

あの、幸せを。

小さくて、普通で、些細。

でも、それでも、とても幸せだつた、大切な日々。

もう、一度と戻らない。

## 戦争の話

### 戦争の話

昔、ある国に戦争が起きました。  
突然のことでした。

近隣諸国をも巻き込む、大きな戦争にまで拡大しました。  
ある時、戦争の最前線となつていていた場所で、大きな爆発が起こりました。  
した。

そこにいた者たちはもちろん全滅です。

地面が抉れ、身体も、何もかもが吹き飛び、跡形もなくなりました。  
いつそ、清々しいほどにすべてがなくなりました。

それは両国に大きな被害をもたらしました。

なぜ、そんなことが起こったかもわかりません。

爆発は大きな被害をもたらしましたが、それをきっかけに、  
戦争は停戦になり、戦争は幕を引きました。

ある青年の話です。

その青年は爆発のあつた時、その場にいました。  
あの爆発で、ひとりだけ生き残りました。

青年が意識を取り戻し、国に帰つた時には、  
しかし、戦争から2年もの時が経つていました。

そのとき国は敵国のスパイだと青年に判断を下しました。

国としては、停戦になつて2年という時は、  
非常に危ないのでした。

停戦。終戦ではない。  
両国とも国力も回復してきた。

会戦するのなら、この時ほど都合のよい時期はなかつたのです。  
しかも、秋という、実りの時期に

死んだはずの青年が一人帰つてきたのです。

スパイとしか、思えなかつたのです。

そして青年の恋人と親友を使い、

油断したところを、殺そうと思ったのです。

お膳立てはすべてやりました。

青年が必死の想いで国に戻つてきたのは、  
恋人と親友に会いたかつたからです。

ちゃんと、幸せに、生きているかを確かめたかつたからです。

青年は、国に戻つたら殺されるかもしれないと、懸念していました。  
それでも、国に戻り、二人に会いました。

一人に会えて、青年は安堵しました。

青年は、一人に経緯を話しました。

でも、殺されました。

青年の、親友に。

信じてもらえませんでした。

青年は、殺されました。

それによつて、戦争は停戦から開戦へとなりました。

青年の親友は、嘆き、悲しみました。

友の死に、深く悲しみました。

そして記憶を、なくしました。

そして軍人になりました。

青年の恋人は、青年を嘆き、悲しみました。

青年の親友は青年の恋人と友達でした。

青年の死を悼み、青年の親友と慰めました。

そして青年の親友に恋をしました。

でも、青年の親友は気づきません。

どこまでも平行線のまま、

青年の親友は記憶をなくしたのです。

記憶をなくした青年の親友に青年の恋人は甲斐甲斐しく世話をしました。

その彼女に青年の親友は恋をしました。

一人は青年のことなどまるで気にせず、愛し合いました。

まるで、青年の存在なんて最初からなかつたかのようだ。  
そしてまた、一人は戦争に身を投じました。  
戦争はまだまだ終わりそうもありません。  
戦争は、いつ、終わるのでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1770m/>

---

戦争の被害者

2010年10月11日07時45分発行